

来る七月十七日より開催する本展は、新潟の街を数多く撮影してきたアマチュアカメラマン、桜井進一氏の作品を通して、新潟の街の移り変わりをみる展覧会です。本稿では、展覧会開催にさきがけ知っておくと展覧会がさらに楽しめるトピックを3つご紹介します。

【新潟県産業観光大博覧会】

桜井進一が、カメラマンとして初めて向き合った大イベントが、昭和二十八年（一九五三）年に開催された新潟県産業観光大博覧会でした。桜井進一、高校三年生の夏のことでした。

そもそも、昭和十三年、新潟開港七十年を記念しての「日本海大博覧会」が開催される予定でしたが、時局が戦争へと突き進む中、日本海大博覧会は開催前年に中止となったのでした。

戦後、博覧会開催の機運が再び高まりました。日本がサンフランシスコ平和条約に調印して占領状態から主権を回復したのち、昭和二十七年に博覧会の開催が決定しました。

新潟市公会堂・総合運動場一帯と白山公園を会場に、七月一日から八月三十日まで二カ月間に渡り開催された博覧会には、沖繩を除く四十六都道府県からの出品があり、四十四の特設館が設置されました。会期中に開催された新潟まつりでは神輿や山車も博覧会

場を練り歩き、まつりを盛り上げました。二日間の入場者数は四万人、会場も新潟の街も大いにぎわったようです。

【信濃川兩岸の移り変わり】

大河津分水の通水で信濃川の水量がコントロールできるようになったため、埠頭を持つ近代的な港の建設とあわせ、信濃川下流の兩岸は埋め立てられて、土地利用が可能になりました。大正期に進められた竜が島の築港が完成した昭和初め、兩岸の埋め立てが始まりました。

第一期工事は萬代橋から県会議事堂までの間の兩岸を対象とし、埋め立て開発の一環として昭和橋がつくられました。昭和六年のことです。左岸側には新設の白山小学校がつくられました。

右岸側はその多くが鉄道省鉄道局開局の誘致に使われました。昭和十一年、新潟鉄道局が開局し、埋立地には庁舎や鉄道病院など多くの鉄道機関が建設されました。

萬代橋下流は昭和六年から西岸の護岸工事が行われ、萬代橋下流左岸が埋め立てられると、本町通十一番町にあつた二つの魚卸売市場は埋立地の柳島町に移転しました。昭和二十八年、信濃川右岸万代島対岸に水産物揚場が完成し、水産物の取引は柳島町と東港線の二か所で行われました。昭和三十九

年の新潟地震では両施設とも壊滅的な被害を受けました。これ以後、柳島町の市場は廃止し、水産物の取引は万代島周辺で行われるようになりました。

【新潟駅の歴史】

明治期、北越鉄道の新潟―直江津間の敷設が決定しました。資金難から、起点である新潟の駅は沼垂駅として竜が島に作られることになりましたが、これに反対する市民の思いは沼垂駅の機関庫や新栗の木川鉄橋などの爆破事件を引き起こしました。

沼垂駅開業後も新潟駅設置を求める運動は続き、萬代橋東詰近くに新潟駅を設置することになりました。沼垂駅から本線を延長し、信濃川べりを通って新潟駅に至る路線です。明治三十七（一九〇四）年、新潟駅は現在の弁天公園付近に開業しました。

戦後、新潟駅周辺の鉄道線路を組み合わせる改良計画に基づき、貨客分離のため、昭和二十六年、万代島に貨物駅の万代駅が開業しました。万代島は幕末から明治の初めに形成された信濃川下流の中州島でしたが、戦時中に石炭荷役施設増強のために埋め立て整備され、現在のような半島状になりました。しかし、万代駅も新潟地震で壊滅的な被害を受け、廃止となりました。新潟駅は、昭和三十三年、現在の場所

に移転し、名品パートや食堂などが出店しました。

博覧会が開催された白山公園周辺は当時の風情を残しながらも、現在はゆとりとびあが新たなランドマークになっています。信濃川兩岸はマンションが立ち並び、万代シテイの開業や万代島再開発、やすらぎ提の整備でウォーターフロントとなりました。新潟駅は新駅建設が進んでいます。

本展ではこれらの移り変わりの様子をご覧いただきたいと思えます。ご来場をお待ちしています。

（あいの かおり 学芸員）



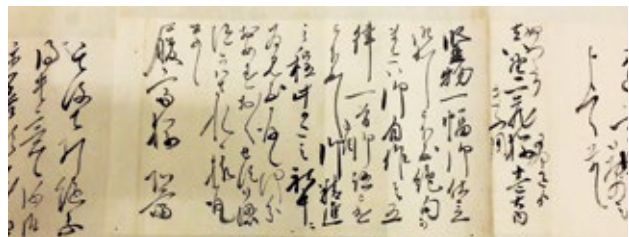
信濃川べりを走るSL 昭和34年11月6日
撮影：桜井進一「新潟わが青春の街角」所収

巻菱湖の手紙

情けない。巻物を広げ最初の一通をみて「なんで御馳走の礼状を巻物にしてるんでしょね。」などと言いながら、いただいてきました。館で広げて三通目に「巻右内」とあり、初めて巻菱湖の書簡を巻子に仕立てたものと気が付きました。手本の菱湖の字しか思い描いていなかったもので、書簡の大胆で勢いのある文字が菱湖とは思いませんでした。

巻子は、沼垂の真野二蔵や乙蔵らへあてた、五月から翌二月までの一〇通の書簡でした。年代は、記載されている書籍名などから文化十一（二八一四）十二年かと推測します（新収蔵品展では文政十三（二八三〇）年としましたが訂正します）。書簡は色々なことを教えてくれます。菱湖が真野家と深いつきあいをしていたこと。新潟で「石川次右衛門」や「大塩源右衛門」の世話になっていたこと。「市島次郎八」や「板三輪」などの豪商と交渉を持っていたこと。新発田・三条・与板・長岡・柏崎などの文人たちの「社中」と交流し、書画会や展覧会を開き、書や漢詩の指導をしていること。江戸から持ち込んだ館柳湾の書籍や大筆などを売りさばっていることもわかります。

渡辺秀英「巻菱湖史傳」（巻町双書「巻菱湖」所収）によれば、文政十三年に帰省した際に酒を飲



巻菱湖書簡巻子(部分)

収蔵資料紹介

飾り箱（二代目萬代橋の橋板製）

本資料は背板に「昭和四年 万代橋架替に当り西側參枚目橋板を以て造る」と墨書されていることから、二代目萬代橋の橋板を使って作られたものと考えられます。製作者は「大工 岩倉正吉」とあります。

二代目萬代橋は、明治四十一年（一九〇八）年三月八日に発生した若狭屋火事で初代萬代橋が焼失した後、架橋された木橋です。水面下にある初代の橋脚を用いて上部を造り換える設計で、設計変更はほとんどなく、橋の長さは四三〇間（約七八二メートル）、橋脚の間隔二二間（約三二メートル）と、初代と同じ長さでした。橋のたもとの親柱、欄干なども初代とよ

く似た意匠で、見分けがつかないほどだったといえます。大正時代から自動車の通行が増え、敷板に穴が開くなど、消耗が進んだため、下流側に鉄筋コンクリート造のアーチ橋が架橋されました。

昭和四（一九二九）年八月に竣工した三代目の現萬代橋です。三代目の架橋が進むにつれ、二代目萬代橋を名残惜しむ声が上がることがになり、昭和三年七月に市民有志が二代目の材木を払い下げてもらい、手工芸品を作る計画を立てたといえます。本資料はこの企画の中で生まれた一品であると思われれます。

（渡邊 久美子 学芸員）



二代目と三代目萬代橋を写した絵葉書 当館蔵